

原 寛*: 秩父三峯山彙の植物補遺

Hiroshi HARA*: Supplementary notes on flowering plants of
Mt. Mitsumine, Chichibu

秩父三峯山地方は古くから植物採集地として知られ、三好学 (1891)・白井光太郎 (1892) 両博士の報告に初まり、樹木については猪熊泰三博士の詳細な研究 (1931 & 34)¹⁾がある。近年この地域は秩父多摩国立公園に編入され、伊藤・靱山・志村諸氏の目録 (1950 & 53)²⁾ が印刷され、又本田正次博士の報告 (1954)³⁾ が出版されてよく分つてきた。私も昨年 2 回三峯神社——白岩山——雲取山の三峯山縦走コースを歩く機会を得たが、この植物景觀についての記録⁴⁾ は案外少いので、その際気づいた事で上記の諸報告と重複しない点をここに記しておきたい。

三峯神社側から進んで行くと、しばらくはなだらかな登りで、先ず地蔵峠 (1523 m)、霧凧峠 (1540 m) の尾根へとつづく。この間 1350 m 附近でハンカイシオガマ、ヤマトキソウ**、アサマヒゴタイ*、オオツリバナ**、コフウロ** が目についた (以下植物名の後に * 印をつけたものは三峯山彙方面では初めて確認したものであり、星を 2 つ ** つけたものは奥秩父全域 (武甲山を除く) から初めて記録するものである。しかしこの中には上記目録に別の名で載っている場合もあるらしい)。地蔵峠は白井博士がジゾウカンバを発見された場所であり、ダケカンバ、ケアオダモ、ミヤマアオダモ、ヒトツバカエデ、サビハナナカマド、アセビ、チチブドウダン、トウゴクミツバツツジ、ニシキウツギ、ベニバナツクバネウツギ等が見られる。霧凧峠から一度 御経平 (1450 m) の鞍部へ下る。ここは比較的植物が豊富で、樹林中にはオオバマンサク、クロカンバ*、キバナウツギ、クリンユキフデ、オオバショウマ、ルイヨウショウマ、レンジョウマ、レイジンソウ、チチブシロカネソウ (前白岩にかけて林下に稀でない)、トリカブト一種、フタバアオイ、ウスバサイシン、コガネネコノメ、ヤブエンゴサク、ヒカゲミツバ、ジャコウソウ、オオキヌタソウ**、ミヤマムグラ*、ホソエノアザミ**、アズマヤマアザミ**、コウモリソウ、タマブキ、アサマヒゴタイ等が生育している。

そこから前白岩 (1740 m) へ向つて急坂を登つて行くと所々に石灰岩が露出していて、ヒロハノヘビノボラス、ウメウツギ、クロウメモドキ*、ザリコミ*、アイズシモツケ* (毛少く花序は無毛の形)、サワダツ、シラヒゲソウ、ダイモンジソウ、キンレイカ、キヌタソウ等がでてくる。これから前白岩の頂まではいくつかの起伏を越え、瘦尾根の場所もあつて、ニッコウヒョウタンボク、チチブヒョウタンボク** (稀)、ミヤマクマヤナギ**、アズマハンショウヅル*、ヤハズハハコ*、イワギボウシ、チチブヤナギ*、オニシバリ**、トゲキクアザミ** (f. *serrata* Kitamura にあたり総苞片の先は長く尾状に尖つ

* 東京大学理学部植物学教室。Botanical Institute, Faculty of Science, University of Tokyo.

た型)、ヒメスミレサイシン等が見付かった。この辺で見知らぬカバノキ属の一種に出会った。近くにはヨグソミネバリ、ジゾウカンバ、ネコシデ、ダケカンバがあったが、その何れとも葉の側脈がヤシャブシを思わせる様に数多く(14-18対)密にならんでいるので区別できる。ヨグソミネバリ(アズサ)に近縁に見えるが、葉の基は心形にならず鋸歯も細かく、芽鱗や若枝に絹毛が多く、又枝を折つてもサロメチール様な臭がしない。葉の外形や芽鱗に少し伏毛のある点等はオノオレに似るが、葉脈多く鋸歯の先は尖り、若枝や葉に白長毛が多く腺点がないので区別できる。又ジゾウカンバやナガバノダ

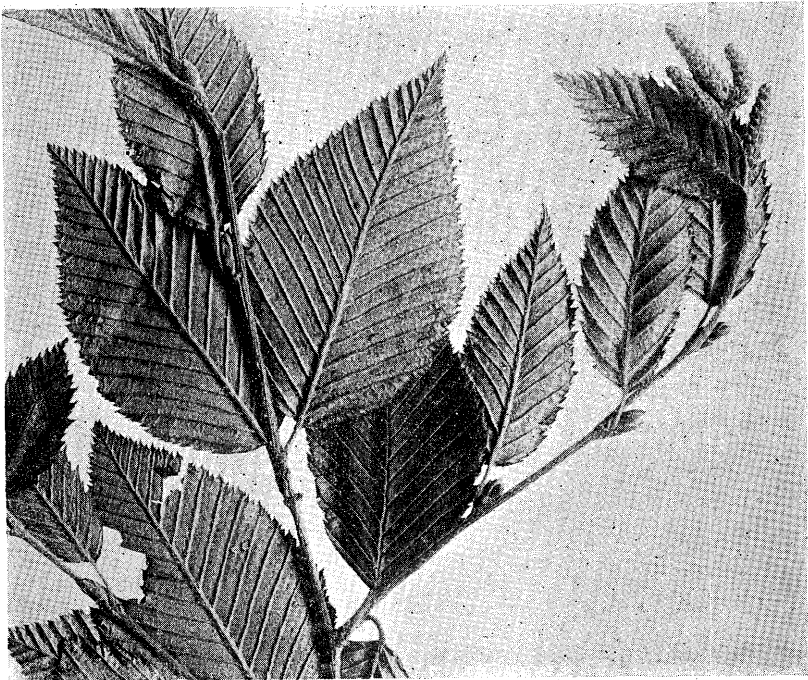


Fig. 1. *Betula chichibuensis* Hara チチブミネバリ ×1/1

ケカンバからも葉脈多く鋸歯は短小で、芽鱗に光沢なく表面に伏毛がある等で異なる。雑種性である事も考えられるけれども花粥は粒がそろっている。同様なものは秩父武甲山にも産し、又上州榛名山(奥山春季氏採集, 科学博物館蔵)にもあるらしい。雌花穂がないので確実な類縁関係は分らないが、既知の何れの種とも異なるから、**チチブミネバリ**と名付けて次に記載する。

Betula chichibuensis Hara, sp. nov. (Sect. *Costatae*) (Fig. 1)

Arbor. Ramuli hornotini praecipue versus apicem dense villosi vix glandulosi,

annotini glabrescentes brunneo-fusci, lenticellis minutis conspersi. Gemmae oblongo-ovatae acutiusculae brunneae vix nitidae, squamis dorso tenuiter villosis. Folia ovata vel oblongo-ovata apice breviter acuminata basi rotundata vel late cuneata margine minute inaequaliter duplicato-serrata, serris acuminatis 0.5-1.5 mm longis, crasse chartacea 3-6 cm longa 1.5-3.2 cm lata, nervis utrinque (11) 14-18 inter se 2-3 mm distantibus supra distincte impressis infra valde prominentibus, primo utrinque dense albo-sericeo-villosa demum glabrescentia sed infra saltem secus nervos dense albo-sericea, infra pallide viridia eglandulosa; petioli 4-7 mm longi albo-sericeo-villosi; stipulae oblongo-ovatae acutae tenuiter villosae. Amenta florifera masculo ad apicem ramuli elongati 2-4 terminalia vel axillaria sessilia pendula; bractae ovatae obtusiusculae ciliatae et dorso parce villosae brunneae ad apicem fuscae; pedicelli dense villosi; filamenta brevissima apice breviter bifida; antherae ellipticae 1-1.2 mm longae; grana pollinis 3-poroidata. Amenta foemina ignota.

Nom. Jap. Chichibu-minebari (nom. nov.)

Hab. Honshu. Prov. Musashi: circa Mae-shiraiwa (ca. 1550 m), in montibus Mitsumine, Chichibu (H. Hara, Sep. 8, 1955, fl. juv. masc.—typus in Herb. TI). Mt. Bukô, Chichibu (H. Hara, Apr. 29, 1934, fl. masc. & Mai. 24, 1953).

This species, although female catkins are unknown, seems to be closely allied to *B. grossa* and *B. Schmidtii*. In Japan *B. grossa* Sieb. et Zucc. is pretty variable in the shape and the size of leaves, the pubescence, and the shape of strobiles and fruiting bracts, but I agree with Schneider's opinion (1916) in uniting *B. carpiniifolia* Sieb. et Zucc. and *B. ulmifolia* Sieb. et Zucc. with *B. grossa*. And *B. sollenis* Koidzumi (1930), *B. acuminatifolia* Vassiliev (1942), and *B. pseudolenta* Vassiliev (1942), all described from Japan, are also included within the range of variations in *S. grossa*.

This new birch can be distinguished from polymorphic *B. grossa* in having shorter-petioled leaves rounded at the base, finely serrated, and with numerous 14-18 pairs of deeply impressed veins, more densely villose young branchlets, and thinly villose bud-scales, acutish thinly villose bracts of male catkins, and its dark-coloured twigs have no fragrance which is characteristic in *B. grossa*, *B. lenta* L. and *B. corylifolia* Regel et Maxim. While *B. grossa* has leaves usually \pm cordate at the base, with coarse long acuminate teeth, and with fewer (8) 10-15 pairs of veins, chestnut-brown branchlets, and lustrous bud-scales only ciliate on the margin.

It differs also from *B. Schmidtii* Regel by many-nerved leaves with acuminate teeth, and densely villose young leaves and branchlets without distinct glands.

前白岩から少し下つて白岩小屋を通り、奥白岩山 (1920 m) へ向つて登る。コメツガ、シラビソ等の針葉樹林へ入ると植物の種類は減るが、イワウチワ (花の白つばいものが多い) やヒメイワカガミの大群落は見事である。この外樹下にはミヤマシグレ、ミヤマモミジイチゴ (稀)、ゴカヨウオウレン、コミヤマカタバミ** (針葉樹林下に普通)、ミヤマスマシ、ミヤマニガイチゴ、ミヤマウド、イワセントウソウ、カニコウモリ、ミヤマモジズリ、キソチドリ、イチヨウラン* 等が見られる。

白岩山を越えて道は芋ノ木ドック (1960 m) の尾根の西側を廻つて下つて行く。やや蔭湿な林中にはヒロハカツラ、アラゲヒョウタンボク**、オオヤマハコベ、ミヤマカラマツ、ヤマブキシショウマ、シモツケソウ、マルバネコノメ** (三峯にもある)、イワネコノメソウ、クロクモソウ、ミヤマタニタデ、ケゴンアカバナ**、イワニンジン、トゲキクアザミ* 等がある。石灰岩地を探るとトガクシデンダ、イトイ、ハコネハナゼキシショウ**、タカネバラ (稀)、イワオウギ**、ミョウギシャジン** 等が見つかる。

一度大ダウ (1790 m) の鞍部へ下りてから慙々雲取山への登りにかかると、急にオサバグサの群落が現われる。雲取山の家 (ca. 1850 m) から雲取山頂 (2018 m) まではコメツガを主体とし、シラビソ、イラモミ、トウヒを交えた針葉樹林である。これにオオカメノキ、コミネカエデ、オガラバナ、ネコシデ、ダケカンバ、サラサドウダン、ホツツジ、リュウブ、ミヤマシグレ、ミヤマウラジロイチゴ等が交り、小灌木としてコヨウラクツツジ、ベニバナツクバネウツギが多い。下草は貧弱で、オサバグサ、マイズルソウ、ゴカヨウオウレン、コミヤマカタバミ、タケシマラン、キソチドリ、ヒメミヤマウズラ**、ジャクジョウバナ、シノブカグマ、ヒメスギラン* 等が見られる。西北側にはモミジカラマツ、セリバオウレン、イトイ、ミヤマウラボシその他草本が多い場所もある。

雲取山頂にはイラモミ、ヤハズハンノキ、タカネザクラ、ニシキウツギ等があり、その南斜面は草原になつているが面白いものは無く、反つて他では 1000 m 位の山地に普通な種類が多い。

このコースから少しはずれるが、甲斐丹波村の三条ノ湯への下り道青岩谷側の石灰岩地 (ca. 1600 m) にはクモノスシダ、ツルデンダ、ウメウツギ、ヒメウツギ、ザリコミ、アイズシモツケ、ミヤマクマヤナギ、クロカンバ、オオバヘビノボラス、マルバサンキライ等が見られた。

この外秩父地方に確実に産するが、今迄記録されていないものに、ヤマミズ、イストウバナ、ヤマホタルブクロ、コメナモミ、セイタカトウヒレン、タチシオデがある。

今度秩父では武甲山にだけ産すると思われていたチチブヒョウタンボク、ミヤマクマヤナギ、オオキヌタソウ、ミョウギシャジン、オニシバリ、ハコネハナゼキシショウが三峯山麓の石灰岩地にも見出されたのはむしろ当然である。古くから採集者が入つているこの地域にも以上の様な追加品があるのだから、日本の植物調査もなお一層の努力が必要である。

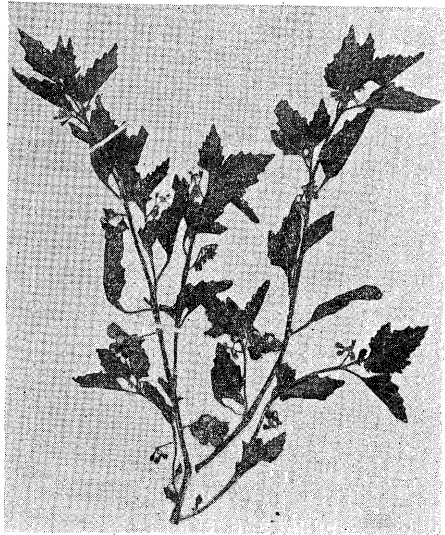
終にこの採集に色々と援助を与えて下さった幾瀬マサ、黒沢幸子、藤井竜之介、金井弘夫の諸氏に深く感謝する。

文 献

- 1) 猪熊泰三：秩父演習林及其附近の木本植物。東大農学部演習林報告 **14**: 1-131 (1931) 同追録 I. 同上 **20**: 189-206 (1934). 2) 伊藤洋・靱山泰一・志村辰夫：奥秩父高等植物目録。秩父自然科学博物館研究報告 **2**: 1-23 (1950). 伊藤洋：秩父多摩国立公園高等植物目録 (I). 同上 **4**: 19-50 (1953). 3) 本田正次：秩父多摩国立公園の植物 1-42 (1954). 4) 松山庫三：雲取山へのぼる。野草 **16**, No. 136 (1950).

○ケイヌホオズキ (浅井康宏) Yasuhiro ASAI: A new naturalized weed, *Solanum sarrachoides* Sendt.

1950年6月、神奈川県鶴沼の荒蕪地で全株白軟毛を被り少々横臥し、葉縁が波状に浅裂するイヌホオズキに近似の一品を得たが、これが *Solanum sarrachoides* Sendtner in Mart. Fl. Bras. **10**: 18, pl. I, figs. 9-12 (1846); L. Abrams, Illust. Fl. Pac. St. **3**: 676, f. 4492 (1950); Fernald, Gray's Man. Bot. ed. 8, 1254 (1950) であることがわかった。その後、本種は見かけないが、相当強壯な雑草の様に見受けられ、当時(6月)すでに未熟の球形の果実を房状につけていた。一年草で草丈30cm許、多少分岐し、花は白色で5-6個を繖状につける。全株(花卉及萼も)開出毛を密生するため白つぼく見える。なお、萼は花後稍果実を包む性質があり、この点他の近似種との区別点ともなっている。



文献に依れば南米(ブラジル)の原産で北米に滞化(太平洋岸)している由であるから、多分北米よりの渡来品であろうと思われる。又東大理学部の腊葉庫に本種と思われる故松崎直枝氏の標本(昭和22年5月23日北米産グリーンピース中に混入—1946.7.31—と名箋に記されている)が一枚所蔵されて居るので参考迄に附記しておくたい。なお、和名は平凡ではあるが、白軟毛を被る点と米名 Hairy nightshade に因みケイヌホオズキ(新称)としたいと思う。終りに種々御教示を賜った国立科学博物館奥山春季先生、東大腊葉庫の標本閲覧その他種々御世話下さった原寛先生にここに厚く御礼申し上げる次第である。